井上円了が受講した井上哲次郎の「東洋哲学史」講義

井ノ口哲也
inokuchi tetsuya

一、はじめに

東洋大学の井上円了研究センターには、井上円了（一八五八～一九一九）が東京大学の学生だった時に受講した井上哲次郎（一八五六～一九四四）の「東洋哲学史」講義の円了自筆のノートが保管されている(1)。筆者が初めてこの事実を知ったのは、国立台湾大学哲学系で開かれたあるワークショップに出席した二〇一四年一二月、国立台湾大学哲学系の佐藤将之教授が御自身の論文「井上円了思想における中国哲学の位置」（『東洋大学 井上円了センター年報』第二一号、二〇一二年九月）の抜刷を筆者にくださった時のお話であり、筆者はかなり強い衝撃を受けたことを今でもよく憶えている。佐藤氏のこの論文には、井上円了の『哲学要領』（一八八六（明治一九）年）に収録されている「支那哲学」の項について、

井上哲次郎の「東洋哲学史」の講義内容を踏襲したものと考えられるが、哲次郎研究者の間では周知のごとく、この「東洋哲学史」の講義内容は、終生出版されることがなかったので、円了によるこの「支那哲学」の項は、日本で西洋哲学受容後に出版された中国哲学史に関する最初の通史的記述となった(2)。

と述べられている。本誌本号には、東洋大学の三浦節夫教授による「「井上哲次郎口述　東洋哲学史」の翻刻　井上円了の東京大学文学部二年生の聴講ノート」が掲載されているが、このたびのこの翻刻によって、円了が影響を受けた哲次郎の「東洋哲学史」講義の内容が初めて公にされるのみならず、円了の「支那哲学」よりも早く成った中国哲学史の通史的記述が明らかにされるのである。この翻刻は、斯様な大きな意義をもつものだと言ってよい。

実は、本誌での「東洋哲学史」翻刻に先んじて、金沢大学附属図書館に所蔵される「高嶺三吉遺稿」中にある井上哲次郎の「東洋哲学史」講義のノートについて、水野博太氏が論文を発表されて、その中でノートの翻刻もされている(3)。水野氏は、円了のノートと高嶺三吉（一八六一～一八八七）のノートを比較して考察した結果、高嶺のノートには哲次郎の「講義を直接記録したものとは思い難い箇所が全体に渡って存在」している点について、高嶺は「円了本（※円了のノートのこと――筆者注）を母体のひとつとする、井上哲次郎が留学以前に行った講義を記録したノート（おそらくは横書き）が当時学生の間で流通しており、高嶺はこれを筆写したのであって、」「高嶺三吉遺稿」中で全五巻から成る「支那哲学」の巻一の表紙に「明治十九年一月　支那哲学　巻一」とあるのは、「その筆写時期を示すものである」という仮説を示しておられる(4)。そういう意味でも、本誌での「東洋哲学史」翻刻は、受講生による直接の記録を明らかにするものとして、甚だ貴重である。

高嶺ノートについては必要に応じて言及することとし、本稿は、あくまでも東洋大学井上円了研究センターが所蔵する井上哲次郎の「東洋哲学史」講義のノートに関して、内容の説明を試みたものである。この点、読者諸賢にあらかじめ御了解いただきたい。

二、井上哲次郎による「東洋哲学史」の編纂

井上哲次郎は、一八八〇（明治一三）年七月に東京大学を卒業したが、卒業と同時に行くはずだった留学の許可がおりず、行けなくなった。不平不満を抱いているところに、東京大学三学部綜理の加藤弘之（一八三六～一九一六）から「東洋哲学史」編纂を勧められ、同年一〇月に文部省に入省して、これに従事することになった。この辺りの事情について記している井上哲次郎の文章を見てみよう。

この頃、加藤綜理は自分に対して、「東洋哲學史」の編纂をやってはどうかと言はれた。自分も東洋哲學史には興味を有ってゐたので、その氣になり、文部省の編輯局に入って、これに從事した。文部省の編輯局は主として教科書を編纂するところであったけれども、自分に對しては、さふ言う教科書でない、「東洋哲學史」編纂を承認してもらったのである。そしてここに一年ばかり居たが、文部省はどうも官僚主義が強くて、自分には餘り適しないやうに思はれたので、一日加藤綜理を訪ねてこの旨を述べたところ、綜理は、それでは大學に來て「東洋哲學史」の編纂をしてどうかと言ふことであった。それは自分の最も希望するところであるから、早速文部省を辭めて大學の編輯所に入り、大學の助教授に就きながら、「東洋哲學史」の編纂に從った。

恰度その頃、大學に編輯所が開設され、數人の學者がこれに關係し、各々その專門とするところに依って各種の編輯を分擔して居ったのである。どう言ふ人が編輯所に居たかと言へば、小中村清矩、物集高見、佐々木弘綱、飯田武郷、久米幹文、三宅雄二郎、大和田建樹氏に自分である。自分は助教授ではあったが、初めのうちは講義をすることなく、專ら編輯に從事し、その後講義を始めたのは、右「東洋哲學史」の原稿が大

分出來てからである。

（『井上哲次郎自伝』、井上哲次郎三十年祭非売品、冨山房、一九七三年一二月）

東洋哲學史は余が明治十三四年の頃より編著を企圖せし所にして、支那哲學に關するもの、印度哲學に關するもの、裒然册を成し、已に書笥に滿つと雖も、未だ整備せざるもの多く、之れを世に公にせんこと、尚ほ十年内外を要せざるを得ず。然れども久しき歳月に渉りて何等の研究の結果をも出ださゞれば、人或は余が業の荒廢を疑はん、是れを遺憾となすのみ。

明治三十年余官命を蒙り、佛国巴里府開會の萬國東洋學會に赴き「日本に於ける哲學思想の發達」を講述し、歸朝以來益々日本哲學に關する史的研究の必要を感じ、聊か德教の淵源を闡明し、學派の關係を尋繹せんことを務めたり。其稿亦積んで、篋底に充つるに至る。就中陽明學に關するものは、別に自ら一部を成す。因りて之れを「日本陽明學派之哲學」と名づけ、姑く稿本のまゝ之れを世に公にし、以て之れを大方に質さんと欲す。

（井上哲次郎「日本陽明學派之哲學序」、一九〇〇年九月二四日）

井上哲次郎の言う「支那哲學に關するもの」とは、文部省勤務から東大助教授に転じた後の一八八三（明治一六）年に行った「東洋哲學史」という講義における中国哲学に関する原稿や留学後に発表した論文「性善惡論」（『哲學會雜誌』四七、一八九一年一月）などを指すのではないかと思われる(5)。また、「印度哲學に關するもの」とは、井上哲次郎がドイツ留学後の一八九一（明治二四）年から一八九七（明治三〇）年度までの約七年間にわたって東京大学で「比較宗教及東洋哲學」という題目のもとに行ったインド哲学の講義の原稿とその講義に関係して書かれたインド哲学関係の論著を指す(6)。この後に、江戸儒学三部作（『日本陽明學派之哲學』・『日本古學

派之哲學』・『日本朱子學派之哲學』）が公刊されていることからすれば、井上哲次郎の構想した『東洋哲学史』とは、インド哲学・中国哲学・日本哲学から構成されるもの、ということになる。

こうした留学後に現れた哲次郎の活動については、その契機を留学中の哲次郎の意識にもとめることができる。哲次郎の留学中の記録『懐中雑記』（全二冊、都立中央図書館「井上文庫」所蔵）を分析した大島晃氏が、「欧州の哲学界がおしなべて東洋哲学に無知であると気付いた井上は、もともと留学前に従事してきた「東洋哲学史」の編纂が必要不可欠の事業と意識し得るに至ったと考えられよう。しかも西洋の哲学を修めている自分こそその使命を担い得ると強く自覚したのではないか。」(7)と述べているのが正鵠を得ていよう。そして、江戸儒学三部作については、一八九七（明治三〇）年にパリで開かれた万国東洋学会に出席したことで、「歸朝以來益々日本哲學に關する史的研究の必要を感じ」、東大でのインド哲学の講義を了え、江戸儒学三部作の執筆に精力を注いでいった、と思われる。

三、井上円了が受講した井上哲次郎の「東洋哲学史」講義

さて、円了のノートの内容であるが、冒頭に二行分のスペースを用いて「東洋哲學史　井上圓了」と墨書され、次の一行に「井上哲次郎氏口述」とあって、さらに一行空けてから「儒學起源」という単元に入っている。ここでは、「儒學起源」を皮切りに、哲次郎がどのような内容の「東洋哲学史」の講義を展開したのか、をうかがっておきたい。

「儒學起源」は、「孔孟ノ道」「孔孟ノ學」を中心に『礼記』『孝経』『大学』『論語』等の説明を行っている。第四講は、孔学の展開についてであり、後世の学派の主流として、宋代の道学の人々や陸象山、日本の物徂徠・

伊藤仁齋にまで言及されている。

第五講は、孔子の仁についての考察であるが、「第五講　一月十一日」と記され、この直前の行に「明治十六年一月より」と記されていることから、第五講が一八八三（明治一六）年の「東洋哲学史」の始まりであることが分かる。そうすると、直前の第四講以前の講義（冒頭の「儒學起源」か）は、前年の一八八二（明治一五）年の講義、ということになり、これは「巽軒年譜」(8)の

明治十六年癸未（西暦一八八三年　二十九歳）

九月、始めて東洋哲学史の講義を開く。聴講者は井上圓了、三宅雄二郎、日高眞實、棚橋一郎、松本源太郎等拾数名なり。

という記載が間違っている、ということになるであろう(9)。哲次郎の「東洋哲学史」の講義は、明治一五年（一八八二）年に始められた、と考えておくのが自然である(10)。

第六講は、一月十八日に行われ、孔子の高弟の顔回の清貧な生活と彼の死に遭遇した時の孔子の狼狽を示している。レポート課題が出されたのであろうか、〔論文題　論孔老二氏之學　二月十五日為期〕と課題と締切日が記されている。

第七講は、一月二十五日に行われ、孔子ノ道（孔子道徳）について説き、『論語』の文章について宋代の張子や程子の解釈を参考にして理解につとめている。

第八講は、二月一日に行われ、『論語』の文章を手がかりに、「脩身」について検討されている。

第九講は、二月十五日に行われ、「孔學ノ風タルヤ仁義を尊シテ利ヲ賤シムモノトス」ることを『論語』の文章や程子・朱子の解釈を手がかりに検討している。

第十講は、二月二十三日に行われ、老子（無名）・荘子（無々）・列子（疑獨）と孔子（大極）とを比較したり、欧人の孔学に対する評価について述べられている。

第十一講は、三月八日に行われ、孔子―曾子―子思―孟子という孔子没後の孔学の学統について記録され、特に子思の作とされる『中庸』と孟子の履歴についての記述が多い。

第十二講は、第十一講から一ヶ月以上過ぎた四月十二日に行われ、『孟子』の構成や作者に関することや、「孟子學」として「仁義」「養」「良心」「性善」がとりあげられ検討されている。

第十三講は、四月二十六日に行われ、孟子学に集中していて、孟子の説いた仁義や性善や浩然之気について検討された。

第十四講は、五月十日に行われ、仁義に基づく孟子の政治論の孔子との異同について、実例を挙げて説明されている。

第十五講は、五月十□日（おそらく十七日）に行われ、荀子・『荀子』の解説であり、勧学篇・天論篇・性悪篇については「右三篇ハ全部中ニテ尤も讀ムヘキ所ナリ」と述べ、特に天論と性悪についての説明に力点が置かれている。

第十六講は、五月二十四日に行われ、荀子の勧学と礼について説明されている。

第十七講は、六月一日に行われ、楊雄の思想をとりあげ、「反離騒」の賦、『法言』、『太玄経』について解説されている。

「東洋哲学史」講義のノートは、以上で終わっている。こうして見てみると明治一五（一八八二）年一二月から翌明治一六（一八八三）年六月にかけての約七ヶ月で解説されたのは、儒学の起源から始まり、孔子や孔学の系統については第四講から第十一講までの八回にわたり、第九講から第十四講までの六回にわたって孟子学・『孟子』が検討され、荀子は第十五講・第十六講の二回、楊雄は第十七講の一回だけ、という内訳であった。簡略に述べるなら、孔子→孟子→荀子→楊雄という春秋時代から前漢時代末期までの儒家思想の流れが井上哲次郎の描いた「東洋哲学史」であった、ということになる。この根拠は、第十二講の中で、「孟子學〇其學ハ孔子ヲ祖述スルモノニシテ荀子楊子ト同シ」とあることに明らかである。すなわち、孔子の学問・教えを祖述する（＝厳密に言えば、一言一句違うことなく盲目的に踏襲する）者たちを時系列順に位置づけて描かれたのが哲次郎の「東洋哲学史」であった(11)。

四、井上哲次郎における東洋哲学(史)の位置

では、井上哲次郎にとって、東洋哲学（史）とは、どういうものだったのであろうか。ここでは、このことを考えたい。

晩年、哲次郎は、東洋哲学史について、次のように述べている。

> 併し、東洋哲學史を講ずるからと云って、西洋哲學を顧みないなどという意味ではない。哲學は東洋にも西洋にもあるので、兩者を併せて研究して公平なる立場を取って哲學を講ずるべきであると思ふたからである。東洋哲學のみに偏することがいけないと同時に、西洋哲學のみに偏するのがいけないと思ふ。今後哲學

を講ずるのには、東・西洋の哲學を講じ、其の差別を解消し、而してそれ以上に出づるものでなければならないと、斯う考へて居るものである。

（『井上哲次郎選集』〔潮文閣、一九四二年一一月〕の井上哲次郎による一九四一年五月の「序」六頁）

具体的に、哲次郎は、どうやって東洋哲学と西洋哲学を「併せて研究して公平なる立場を取って哲學を講じ」、「東・西洋の哲學を講じ、其の差別を解消し、而してそれ以上に出づる」ように努めたのであろうか。事実、哲次郎は、たとえば、論文「孔子とソクラテース」（『東亜之光』第九巻第一号、一九一四年一月）といった「是迄孔子とソクラテースとを對照して論じた内外の學者は一向無い」（一頁）状況の中で、東西の偉人同士を比較検討する論文を出す等、自ら東洋と西洋の哲学の比較と融合を実践することに努めたが(12)、もう少し具体的に述べているものを見てみよう。

歴史的に考察すれば、東西洋の哲學は全く違った系統のものであるから、區別しなければならない。併し今後哲學するに當っては、何も東西洋の區別する必要はない。東西洋の區別を超越して、日本人であるからには日本精神の立場から哲學するより外はない。それに就いて一言して置くが、カントの『實踐理性批判』の中心問題とも云ふものは、普遍妥當の道德律を設定することであった。それは即ちカントが説き出したる「無上命法」（カテゴー・リッセル・イムベラティーフ）である。ところが、あのやうな形式を採って云ひ表してはないけれども、同じ趣旨が儒教にも能く現れて居る。『中庸』に斯うある。

君子ハ動イテ世々天下ノ道トナリ、行ウテ而シテ世世天下ノ法トナリ、言ウテ而シテ世々天下ノ則トナ

ル。

とある。是れは時間的に普遍妥當を云ったばかりでなくして、空間的にもそれを意味して居る。

それから陸象山だの王陽明だの其の他支那の哲學者が別語を以て同一の普遍妥當の道德律を述べて居る。是等後世の人は理を以て一貫せるものとしてそれを説いて居る。理は卽ち理性である。それであるから其の趣旨は矢張り「無上命法」と同じことである。さういふやうなことは佛教の中にも、それから『チェンドアペスター』の中にも見えて居ることである。

今後は西洋と云はず東洋と云はず、凡そ哲學者の宇宙人生の事を思索するに當って參考となるものは考慮に入れて　而して天空海濶の立場を執って、新なる思索の方針を開拓すべきであると思ふ。決して單に融合することに止まるべきではない。

（傍線筆者。「東洋哲學の異同及び融合」、『理想』第一〇二号、一九三九年／『井上哲次郎選集』、潮文閣、一九四二年一一月）

この引用した文章中のキーワードの一つは、「普遍妥當」であろう。哲次郎は、カントの『実践理性批判』と『中庸』に「同じ趣旨」すなわち「普遍妥當」を見たのである。「東西洋の區別を超越」した「普遍妥當」の考察、このことを哲次郎流に言い換えたものが、筆者が傍線を施した文章であろう。

これは、哲次郎の六年半に及ぶドイツ留学の経験が、自分こそが東洋と西洋の哲学を公平に語る資格を有している、との自負を生んだのであろう。この点、筆者は、先に引用した大島晃氏の意見と全く同じである。

五、おわりに

以上、このたび翻刻される井上哲次郎「東洋哲学史」講義を筆記した井上円了のノートをめぐって、まず哲次郎の「東洋哲学史」成立までの背景事情を説明し、ついで「東洋哲学史」の内容の概要をうかがい、最後に哲次郎にとっての東洋哲学（史）について考察を加えた。翻刻の解説に値するものかどうか、甚だ心許ないが、哲次郎にとって東洋哲学（史）とは何だったのか、この点に力点を置いて記したつもりである。

今回、筆者の不手際で、金沢大学附属図書館所蔵の高嶺三吉のノートを調査できなかったことが、心残りである。水野氏による翻刻は、とても貴重でありがたいものであるが、筆者としては、やはり現物を実見したうえで、筆者の意見を表明したいと思う。今回、円了のノートの考察に集中したゆえんである。

実は、本稿を起こす際に、筆者には、今までに日本のアカデミズムにおいて（複数の研究者たちによる執筆ではなく）あくまで一人の研究者によって著わされた中国思想の通史を漏れなく調査し、その一点一点の内容や特徴を紹介したうえで、あらためて井上哲次郎『東洋哲学史』の今日的意義を述べてみたい、との考えがあった。いささか手前味噌ではあるが、筆者の著書『入門　中国思想史』（勁草書房、二〇一二年四月）は、現在のところ、日本において一人の研究者によって著わされた中国思想通史の最後に位置するものとなっている。近現代日本における諸事例を追跡することで、一研究者が中国思想の通史を書き上げることの意義をつきとめたい、という筆者個人の強い関心が根底にある。しかしこれは、調査を始めてみて、とてつもなく膨大な作業量となることを思い知らされ、今回の投稿の機会には断念せざるを得なかった。これについては、他日を期することとしたい。

【註】

(1) 三浦節夫『井上円了―日本近代の先駆者の生涯と思想』（教育評論社、二〇一六年二月）の「第二章　東京大学時代」九五頁下段の本文と一一一頁～一一二頁の注13に示された筆記ノートの内訳を参照。

(2) 佐藤将之「井上円了思想における中国哲学の位置」（『東洋大学 井上円了センター年報』第二一号、二〇一二年九月）の横組四五頁。

(3) 水野博太「「高嶺三吉遺稿」中の井上哲次郎「東洋哲学史」講義」（『東京大学文書館紀要』第三六号、二〇一八年三月）。

(4) 注(3)所掲水野博太氏論文の縦組二三頁下段～二四頁上段

(5) 井上哲次郎の論文「性善悪論」をめぐる問題については、大島晃「井上哲次郎の「性善悪論」の立場―「東洋哲学」研究の端緒―」（『ソフィア』第四二巻第四号、上智大学ソフィア編集室、一九九四年一月／大島晃『日本漢学研究試論―林羅山の儒学』〔汲古書院、二〇一七年一二月〕に収められる）を参照。大島氏には、井上哲次郎による『東洋哲学史』研究の一環として『日本陽明学派之哲学』が刊行されたことを考察している論文「井上哲次郎の「東洋哲学史」研究と『日本陽明学派之哲学』」（『陽明学』第九号、二松学舎大学陽明学研究所、一九九七年三月）もある。併せて参照されたい。

(6) 井上哲次郎が東京大学で行ったインド哲学の講義録をめぐっては、今西順吉「わが国最初の「印度哲学史」講義―井上哲次郎の未公開草稿―」（一）～（三）（『北海道大学文学部紀要』三九―一・三九―二・四二―一、北海道大学文学部、一九九〇年一一月・一九九一年二月・一九九三年一一月）、今西順吉「漱石と井上哲次郎の「印度哲学史」」（『松ヶ岡文庫研究年報』第四号、財団法人松ヶ岡文庫、一九九〇年三月）、磯前順一「井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義―明治二〇年代の宗教と哲学―」（『思想』第九四二号、岩波書店、二〇〇二年一〇月／「明治二〇年代の宗教・哲学論―井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義―」と改題されて磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜―宗教・国家・神道―』〔岩波書店、二〇〇三年二月〕に収められる）、磯前順一・高橋原「井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義―解説と翻刻―」（東京大学史料の保存に関する委員会編集『東京大学史紀要』第二一号、東京大学史史料室、二〇〇三年三月）を参照。この講義に対応して書かれた井上哲次郎の著作が『釈迦牟尼論』（文明堂、一九〇二年一一月）である。

(7) 大島晃「井上哲次郎の「東洋哲学史」研究」(『ソフィア』第四五号第三巻、上智大学総務部広報課、一九九六年一〇月／大島晃『日本漢学研究試論—林羅山の儒学』〔汲古書院、二〇一七年一二月〕に収められる)。

また、大島晃氏も引用しているように、井上哲次郎自身が、

東洋哲学を研究して西洋哲学と比較対照して、そして一層進んだ哲学思想を構成するといふことは、東洋人としては最もその方法を得たものと考へられる。……。殊に、宗教や倫理の範囲に於いては一層東西洋の哲学的史実を頭にもって、これを咀嚼し、これを消化して、更に前途に発展してゆく抱負がなくてはならぬ。それ故に自分は西洋の哲学を攻究すると共に東洋の哲学の研究を怠らず、両者の融合統一を企図することを以て任とするやうに力めた次第である。

(『明治哲学界の回顧』、前掲)

と述べているのも参照。

(8) 井上哲次郎「巽軒年譜」(『井上哲次郎自伝』、井上哲次郎三十年祭非売品、冨山房、一九七三年一二月)。

(9) 注(2)所掲佐藤将之氏論文は、その注(7)において、

「巽軒年譜」(『井上哲次郎集』第8巻　東京：クレス出版、2003年、74頁)によれば、井上哲次郎の「東洋哲学史」の講義は明治16年に始まったとされるが、円了による同科目の筆記ノートには、第五講が1月11日と記されており、講義の日付は以下一週間ごとに進む。したがって、哲次郎が前年の12月から「東洋哲学史」の講義を始めていたことは確実である。つまり、円了のノートは『巽軒年譜』の記述の誤りを正す上でも貴重である。

(横組五三頁～五四頁)

と指摘している。筆者も、そうだろう、と考えている。すなわち、年末年始の二週間をのぞき第四講が一二月二二日に行われたとしても、第一講は一二月一日に行われた、という計算になるからである。また、注(3)所掲の水野博太氏論文も、

……、井上哲次郎が自撰の年譜で明治一六(一八八三)年九月に「始めて東洋哲学史の講義を開く」としたのは誤りで、実際には前年度より講義を始めていた。先述の松本源太郎は、そもそも松本の聴講自体が井上の記憶の誤りでないとすれば、明治一六(一八八三)年九月から初めて講義に参加したと考えられる。

(縦組二三頁上段)

と述べている。水野氏の調査によると、哲次郎が聴講者として挙げた松本源太郎は、一八八二(明治一五)年一二月当時の在籍学生として確認できず、その翌年度の一八八四(明治一七)年二月時点で在籍を確認できる、という(縦

組二一頁上段）。

(10) 現に、注(1)所掲三浦節夫氏著書では、「第二章　東京大学時代」の九六頁～九七頁の「表1　井上円了の文学部時代の講義と論文」で、円了の第二学年（明治一五年度　一五年九月～一六年八月）の「講義」の中に「東洋哲学――講師は井上哲次郎。東洋哲学史。」を置いている。また、この本の一一一頁～一一二頁の注13に示された筆記ノートの内訳を見ても、第二学年に「東洋哲学史　巻一〔一頁。東洋哲学史　井上哲次郎口述　井上円了〕」が著録されている。

(11) 注(3)所掲水野博太氏論文中の高嶺三吉のノートとの大きな違いを述べておくと、高嶺ノートには、講義の回数表記がない、ということである。これでは、哲次郎がどこからどこまでを、一つの講義で話しているのかが不明である。また、円了ノートに載っていない情報が頗る多く、また円了ノートの情報が無い箇所もあるが、これについては、今後の考察を待ちたい。孔子→孟子→荀子→楊雄という流れは、高嶺ノートも同じである。

(12) 哲次郎は、「孔子とソクラテース」において、孔子とソクラテスの「類似點」と「差異點」を列挙して比較する方法をとっている。比較の結果、「道徳の師としては孔子の方がソクラテースに勝っているかの如き感があります。其代りには哲學者としての態度はソクラテースの方が孔子に優って居る。」（一六頁）と述べているが、これは、東洋と西洋の哲学の「融合」とは言い難く、単なる比較にすぎない。ただ、比較と融合についての哲次郎のこうした考えは、他の文章にも見えている。一例を挙げておく。

人によっては、よく東洋の哲學を研究しないで、東洋の哲學は單に考古學的、文獻學的の價値より外にないとして顧みないやうであるが、それはよく東洋哲學を研究せざるの罪に歸する。東洋哲學を研究して西洋哲學と比較對照して、そして一層進んだ哲學思想を構成するといふことは、東洋人としては最もその方法を得たものと考へられる。殊に、印度哲學、その中でも支那、日本に發達した佛教哲學の中に大いに哲學上考慮すべきものがある。……。所が東洋の哲學を咀嚼しないで單に西洋の哲學の受け賣りをして、飜譯的、紹介的に煩瑣なる羅列を試み、鸚鵡的に繰返すといふやうな狀態で、眞に活躍したる哲學的精神の甚だしく缺乏したことに驚かざるを得ないのである。殊に、宗教や倫理の範圍に於いては一層東西洋の哲學的史實を頭にもって、これを咀嚼し、これを消化して、更に前途に發展してゆく抱負がなくてはならぬ。それ故に自分は西洋の哲學を攻究すると共に東洋の哲學の研究を怠らず、兩者の融合統一を企圖することを以て任とするやうに力めた次第である。……。

（井上哲次郎『明治哲學界の回顧』〔岩波書店、一九三二年一一月〕の「結論―自分の立場」八五頁～八六頁）

なお、近代日本の西洋哲学と東洋哲学の「融合」については、高坂史朗「東洋と西洋の統合―明治期の哲学者たちの求めたもの」と中村春作「近代の「知」としての哲学史―井上哲次郎を中心に」（両篇とも日本哲学史フォーラム編『日本の哲学』第八号〔昭和堂、二〇〇七年一二月〕所収）を参照。

附記：円了の筆記ノートの所在を教えてくださり、本稿を執筆するように勧めてくださった佐藤将之氏と、翻刻を公開に先んじて見せてくださった三浦節夫氏は、筆者に対し、細やかに便宜を与えてくださった。佐藤氏と三浦氏のお二方に心から御礼を申し上げる。